

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 6号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十四年六月
第六号

< 2012年6月 >

古賀 順子

「初夏」

季節の到来を告げる行事はいろいろあります。5月末カンヌ映画祭が終わると、2週間に渡る全仏オープンが始まります。男女64名のトッププレーヤーたちがトーナメント戦で競う初夏の風物です。今年は5月27日から6月10日の日程で試合が行なわれました。

ブルーローニュの森南端にあるローラン・ギャロス。地下鉄10号線「ポルト・ドットイユ」で降りると、ホームからテニスコートへ向う人の波が続きます。快晴の爽やかな風に吹かれ、マロニエの並木道を歩きます。会場に入るとローラン・ギャロス・グッズを売るお店が並び、世界中から集まったテニスファンで溢れています。私が観戦に行った29日は男女ともに1回戦。5番コートで森田あゆみ選手対スロベニアのポロナ・ヘルツォグ選手。応援の甲斐あって、真っ黒に日焼けした森田選手が3-6,6-4,6-4で勝ちました。ベスト8からの試合は言うまでもなく、1,2,3回戦も予想外の展開や新人の活躍など見所が一杯です。ジョン・イスナー(米)と5時間を超える熱戦の末、18-16の凄いスコアで最終セットを勝ち取ったポール＝アンリ・マチュー(仏)など、フランスの健闘が連日生中継されました。

フランスはテニス発祥の地です。現代テニスはイギリスのローン・テニス(芝コート)が元になっていますが、フランスの「ポーム球戯」(ジュ・ド・ポーム)に由来します。「ポーム球戯」の歴史は古く、素手や球を持つ手だけに皮手袋を着用していたのが、

16世紀に入りラケットを使うようになります。フランソワ1世、アンリ4世など国王から庶民に至るまで「ポーム球戯」は15-16世紀フランスで大流行します。庶民が毎日ポームに熱中して仕事をおろそかにするので、試合は日曜日に限るという条令が出たほどでした。17世紀に入り、ルイ13世、ルイ14世が「ポーム球戯」を重んじなくなり衰退していきます。そしてルイ16世下、ヴェルサイユ宮殿のポーム球戯場で、フランス革命直前の1789年6月第3身分議員を中心に、憲法制定を求める「テニスコートの誓い」が起こります。

フランスのテニス人口は多く、3大スポーツのひとつになっています。「フランス・テニス連盟」によれば、2009年ライセンス保有者は百万人を越え(1.125.200)、国内に8.300以上のクラブがあります。参考までに、1位サッカー(ライセンス数2.225.595/クラブ数18.199)、2位テニス、3位乗馬、4位柔道と続きます。フランスはスポーツ大国でもあります。

フランス人にとって特別の思い出があるローラン・ギャロス。女子は2000年マリー・ピエルス、男子は1983年ヤニック・ノア以来優勝がありません。今年の結果は、女子は美人マリア・シャラポヴァ選手がローラン・ギャロス初優勝。男子は決勝まで1セットも落とさず、圧倒的に強かったナダル対ジョコビッチ。10日決勝戦が雨で2回中断され、試合は翌日に順延されました。フランス選手がローラン・ギャロスを制するのは当分難しそうですが、フランス各地でテニスを楽しむ人たちの姿は昔も今も変わりません。